

私にも 言わせて! 第138回

ご縁がつつながり、行政の世界へ 人生何が起きるか分からない



神戸市健康局保健所
保健課 課長
岡島 花江

2004年神戸大学医学部卒業後、神戸市民病院機構神戸市立西神戸医療センターの初期研修を経て、麻酔科を専攻。2013年の出産後に臨床を離れ、神戸市健康局保健所の非常勤医師として区保健センター等に勤務。新型コロナウイルス感染症を機に保健所での勤務が本格的となり2023年4月同所に入職。

私は神戸市保健所への入職に至るまで、公衆衛生に特に関心を寄せたことはありませんでした。麻酔科学や集中治療学が非常に楽しく、急性期医療にこそ憧れの臨床医像がありました。しかし人生何が起きるか分からないもの。ご縁に導かれて保健所に入職して約1年。振り返ればすべての経験が生かされる場所にいます。

神戸市保健所と出会うまで

私が初期研修医になった年は、病院が大混乱の年でした。「新医師臨床研修制度」が始まった年であり、マッチングシステムという大きなシステムが施行された年です。夏ごろに病院見学や面接、また病院試験があり、今となっては準備に追われた病院はさぞかし大変だったと存じます。リクルートスーツを着ながら右往左往した暑い夏を過ごした記憶は鮮明です。東京、岡山、奈良、京都など憧れの病院へ飛び立つ級友も多く、臨床を知らないままに

「どんな医師になるのか」を自分でカスタマイズしなさいと言われていたようでした。幸いにも私は研修希望先に迷いはありませんでした。

希望先は市民病院群（当時は地域医療振興財団）の一つでした。京都大学、神戸大学、中央市民病院の3派を礎に開院され、当時の設立メンバーが患者のための病院にしたいと一丸となって尽力された話は後々まで有名です。空間的にも開放的な医局にこだわり、スキー旅行、新人歓迎会、新年会も開催され、互いの診療科へのリスペクトが高く、診療科の垣根がない、風通

この1年を振り返り

それをご縁に、ポストコロナも保健所で公衆衛生業務を続けてはとのご提案をいただき、昨年度に入職いたしました。神戸市保健所では在宅勤務も可能ですし、週1日は医師のスキル維持のために臨床診療を続けられるところが魅力です。また、政令指定都市の本庁業務のほか、各区保健センターに兼務があります。私は難病事業、公害事業、災害対応、垂水保健センターを担当しています。

ひとたび入職してみると、「常任、予特、決特」という耳慣れない言葉が飛び交い、自民党とか共産党とか「政治」がからみ、さらには〇〇先生というのが医師ではなく議員先生だったり…。コロナ禍が落ち着くとともに、本来の保健所の姿が見えてきました。今はまだ公衆衛生学という学問まで行きつかず、日々業務を精いっぱいこなしている状況ではあります。これから公衆衛生医師として諸先輩方のように地域の健康施策にも貢献できるように研さんを積みみたいと思います。

最後に…

公衆衛生医師と行政医師

保健所に入職してから、「神戸市保健所の行政医師の」と名乗るようになりました。公衆衛生医師（保健所等医師）という名称は厚生労働省ホームページにも記載がありますが、行政医師が果たして正式名称であるのか、まだまだ不勉強のため分かりません。しかし、この1年を振り返ると、私の通過した道は行政医師であったと感じます。

難病業務については、特定の神経疾患に対する運動支援が、行政または難病支援センターなどでできないかと考えました。偶然、運動支援を行える場所を確保できたため、神経系難病と結び付いたのですが、残念ながら条件は合致しませんでした。基本的な話ですが予算在りきだと、事務的側面について知りませんでした。また、危機管理では行政医師が医療コーディネーター、DMAT、DHEATを熟知する必要があります。研修参加から医師全員で取り組んでいます。最後に、神戸市内の医療機関では医療事故に関する告発がありました。医療法25条

学校ではPTA役員として学校教育や教育現場の難しさを知りました。どの場面においても、活躍する母、教職員、NPO法人職員の方々と畑は違えども、組織として成功している場所では、活発に議論があり、お互いの意見を聞く習慣があり、プライドがあり、現場に愛着を持ち、さらには人と人のつながりから多くのボランティアの支えがあるということを知りました。

また、子どもの親友の弟児が肢体不自由であったため、親しい家族同士で泊まりがけのキャンプやイベントを計画していました。難病を抱える母の悩みを伺いながら、すべてを母が負担するのではなく、もっと幅広い支援の選択肢があればよいのにと感じていました。そのような日々の傍らで、神戸市保健所の区業務の一つをお手伝いしませんか、とお誘いいただき、少しでも社会貢

の2の下、臨時の立入調査を重ね、医療安全体制の不備を指導しましたが、繰り返し是正されないことに対して、県下初の改善措置命令の行政処分が下されました。病院の入り口に報道カメラマンが待ち構え、記者会見後のぶら下がり取材など、私の当初の計画にはない1年を過ごしました。「人生何が起きるか分からない」と日々感じています。それと同時に医療安全の基盤をつかさどる職員間の風土、組織としてのガバナンス力、それはすべての医療機関で幹部職員が熟考すべき課題と思います。今、臨床を離れていながら医師の在り方を深く考えています。

私自身は非常に風通しの良い職場での居心地の良さ、正の連鎖を研修医時代に教わったこと、またさまざまな組織での活動経験が財産になったと思っており、今の行政職場にも生かしていきたいと思っています。入職後に過去の経験が生かされるのがとても多く、ご縁に導かれたこの場所で、まだまだ未熟ですが精いっぱい頑張つてまいりたいと思います。

これからもご指導ご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

新型コロナウイルス感染症で 見た景色

徐々に業務が増えてきたころ、COVID-19によって街の風景が変わりました。第3波が発生していた2021年初めに、「陽性告知と発生届作成ができる非常勤医師が必要です」と、保健所よりご連絡をいただき、すぐに行ってみました。広いワンフロアにある臨時の対策室では、デジタル戦略部によるシステム活用、保健師の大量投入、搬送車の運転手テーブルや、ホテル療養所班などが次々と立ち上がっていき、行政対応の早さに驚かされました。

救急搬送の調整や、入院調整、療養所診察などを非常勤医師たちで短時間ずつ勤務し、広く浅くお手伝いに当たりました。今となって思えば、通常の保健所業務も細々と並行して続けられていたわけで、本当に災害級の対応であったと気付かされました。